



心の歌を奏で て

—仮面の国—
①の②

芳田尚哉

結局、そのままミカツチさんも一緒に向かう事になった。

俺たちの事を確信したのか、俺たちの力になると言い出したのだ。

正直ありがたかった。

だけど、そこまで甘えていいんだろうか。

「わたしは、わたしのために、お二人に協力したいのです」

そう言われては、断れない。

「幽谷までは、ここから徒歩しかないようです」

駅を降りてから、フェイズさんが調べてくれた。

「徒歩か……。どれくらいなんだろう」

「時間はわかりませんが、あの山がそうらしいです」

キヨカの質問に、フェイズさんが場所を指して教えてくれた。

「「……………」」

「遠いね」

俺とティアナさんが絶句している横で、キヨカは普通に感心していた。

そうだ。こいつは、普段からこういう距離感の生活だった。

目的の山は、遙か遠くに見える。一時間……じゃ無理だろうな。二、三時間はかかるだろうな

。

「ゼファーさんという方は有名らしく、住んでいる場所も教えてくれました。あの山の麓(ふもと)だそうです」

麓か……。よかった。登らなくていいだけで安心する。あれを登るなんて、ぞっとしない。

ハイキングっていうよりも、登山って感じがするんだよな。緑いっぱい景色を楽しめる……わけじゃない。なにせ、岩山だからな。

俺たちは、ゼファーさんが住むという場所を目指し、歩き始めた。

ミカツチさんは、俺たちの一步後ろをゆっくりと歩いている。どうしてもこの距離らしい。

今は落ち着いているように見えるが、まだ心は傷だらけだろう。せっかくの仇を逃がしてしまったのだから。

本当は色々訊きたいんだけど、訊くわけにはいけない。この国の決まりがあってよかった…と思う。もし訊いたら、デリカシーがどうのとか言われるんだろうな……と、考えるくらいはできた。

それにしても、この周辺はなにもないよな……。

街があった形跡はあるものの、今は廃墟(はいきょ)のように……というか、まんま廃墟だ。

鉱山で栄えていた街が、廃鉱(はいこう)になるとこうなるんだな……。

そんな寂れた中でも、人が住んでいるらしく、所々に生活感がある。一応、街として機能しているようだ。

ここに残っている人は、いったいどんな人たちなんだろう？ 人がどんどんいなくなってもま

だここに残る。ここには、そうさせるなにかがあるんだろうか。

「なんにもないね」

「そうだな」

国が広い割に人口があまりいないので、比較的閑散(かんさん)としている国だが、ここはそれが顕著だ。

開いている店はほとんどない。それこそ、生活必需品である食料関係の店がほとんどだ。

「この名物ってなんだろうね」

と、キヨカは飲食店を見つけて呟く。ここに来て、初の飲食店だ。まあ、色々あっても人がいないもんな。

閑散とした中を歩くのはつらい。淋しくなってくる。

誰も住んでいない家が建ち並ぶ様は、見ても楽しくない。

「この辺りは、すっかり人がいなくなってしまったみたいですね」

フェイズさんが呟き、

「そうですね。人がたくさんいた頃に来てみたかったですね」

と、ティアナさんが答える。

なんだかいい雰囲気だな。

「なんだかいいね、ああいうの」

キヨカが小声で話し掛けてくる。

「ああ、そうだな」

同じ考えだった事もあり、なんとなく自然とそう答えていた。

「おっ、いつになく素直だね。私もファイとああいうやり取りしたいなあ〜」

キヨカがニヤニヤしながら言う。

しまった……。油断していた。完全な不意打ちだ。

「それとこれは別だろ」

「もう、照れちゃって……。恥ずかしくがらなくてもいいのに。私ならいつでもウェルカムなんだからね」

「はいはい」

適当に受け流しておく。

ちらりと後ろを見ると、ミカツチさんは無言のまま、俯きながら歩いていた。

「ねえ、やっぱりミカツチさんになにかがあったとか、訊かない方がいいよね」

事情を知らないのがもどかしいのか、小声で訊いてくる。

「そうだな。面と向かって話す内容でもないし、そもそも、この国じゃ無理だろうな」

「ファイだけ知ってるのって、なんだかずるいよ」

「そう言われてもな……」

俺は鷹(ファルーコ)に教えてもらってるからな……。鷹(ファルーコ)が俺にだけ教えたのは、きっとそれなりの理由があるんだろうし、そもそも勝手に話していい内容でもない。

「気になる気持ちはわかるけど、とにかく今は我慢してくれ」

「この国を出たら教えてくれる？」

「.....わからない。俺が勝手に話していい内容でもないんだよ」

「そっか.....」

残念そうだが、納得はしてくれたみたいだ。その辺の無理は言わないからな。

「とにかく、俺は無力だったって事だ」

「うん、それはわかってる」

即答された。これはこれで傷付くんだが。

「でも、ファイはなんとかしようとしたんだよね。でも、どうしようもなかったんでしょ」

「.....それはそうなんだけど、やっぱり俺が無力だった。もっと力があれば、なんとかできたかもしれない」

俺が雷公を使えていれば、あの時倒せていたはずだ。逃がす事なんかなかった。

「挽回したくても、俺にはもう機会がなさそうなんだよ」

「あの時の蟲(ベステート)だよね。逃げちゃったんだよね」

「ああ。違う世界に行ったらしくてな。追えないんだ」

「アーちゃんでも無理なの？」

「無理みたいだ。それは確認した」

「もしかして、列車の中で、アーちゃんとしてたこそこそ話ってそれ？」

「そうだよ」

「そっか.....。それならいいや。しょうがない事だよ。事情を知らない私が聞く話じゃないよね」

「.....妙に物わかりがいいな」

「それが私のいいとこだよ。シータちゃんは、頭の回転がいいのです。気配りも最高なんだよ」

「自分で言うか、普通」

「間違っていないからね」

はあ〜.....とため息を吐く。こうも堂々と言い切るのも、キヨカの長所なのかな.....。

そんな話をしていると、目的の山がかなり近くに見えてきていた。

街が終わっており、山が直接見える。

「もうすぐみたいですね」

それでも、結構な距離があるように見えるのは俺だけだろうか。フェイズさんには、それほどでもないのか。

「そうだね。みんな、頑張ろう！」

キヨカも元気だな。

それにしても、本当に辺鄙(へんび)な場所に住んでるみたいだな。この先に誰かが住んでるなんて、それが事実だとわかっていても信じられない。

人の気配がある場所をかなり離れている。本当に住んでるのか？ もしかして、もう誰もいないとかないだろうな。

「この先に住んでいるとは、なかなか考えにくい場所ですね」

フェイズさんも少し不安になってきているのだろうか。

「そうですね。人がいる感じがありませんね」

この先には、岩山しか見えない。本当に住んでいるなら、どこかに小屋でもありそうなものだが、そういうものが見えてこない。もしかして、反対側なんだろうか。

岩山もいくつもあるので、どの麓かもわからないんだけど。

とにかく休憩を挟みつつ歩き続ける。

目的の場所が大きすぎて、距離感がわからなくなった頃、ようやく到着する事ができた。

「日が完全に暮れる前でよかったですね」

本当にそうだ。フェイズさんの言う通りだ。日が暮れてしまったら、こんなにもない場所ではどうする事もできない。

簡易テントで過ごすわけだが、岩場ではあまり過ごしたくない。危険な事も多々あるが、単純に地面が痛い。

「あそこのようですね」

ティアナさんが指す先には、小さな小屋があった。

遠目では見えなかった小屋は、岩に隠れるようにあった。

隙間からは灯りが漏れているので、人が住んでいるらしい。

この辺に住んでいるのはゼファーさんだけらしいので、ここで間違いないだろう。

「どんな人だろうね」

.....そう言われると、なんだか怖くなってくる。

刀匠で隠居生活をしてるんだよな。

なんだか、仙人みたいな感じ.....とか？ 頑固で気難しい感じ.....とか？ 少なくとも、体格はいいよな。

とっつきやすい感じは想像できないな。怖い人じゃないといいな.....。

そう思うと緊張して足が竦(すく)む。

「それでは」

と、フェイズさんがドアをノックする。この人って、結構肝が据わっているよな。旅慣れしてるのか、度胸がある。こういう時でも、躊躇しない。

「すみません。ウォンカさんに言われて来ました。フェイズといいます」

呼び掛けてみるが、中から反応はない。

灯(あか)りが点いているので、誰もいないという事はないと思うんだけどな……。実際、人の気配もある。

って事は――居留守か。

「いないのかな？ って、それはないよね」

「ああ」

俺たちは顔を見合わせる。

「お留守でしょうか」

「どこかに出掛けているのかもしれませんが」

ティアナさんとフェイズさんは、どうやらいい人らしい。中の気配に気付いていない事もあるんだろう。

「ゼファーさん、俺はあなたの力を貸して欲しいんです。どうしても、ゼファーさんじゃないとダメなんです」

中にいる事はわかっているので、声を掛け続ける。

「お願いします。話だけでも聞いてもらえませんか」

「ファイさん……？」

声を掛け続ける俺を、フェイズさんは不思議そうに見ている。

「留守なのでは……？」

遠慮がちにそう言われる。

「それはないでしょう。ゼファーさんじゃないにしろ、誰かがいるのは確実です」

「えっ？ そうなのですか？」

フェイズさんは本気で驚いている。やっぱり、気配を感じていなかったのか。

「単なる居留守なのか、他に事情があるのか……。どちらにせよ、このまま帰るわけにはいきません。俺は、なんとしても、ゼファーさんを連れていかないといけないんです」

「……わかりました。お力になりましょう」

フェイズさんは大きく頷く。

「ありがとうございます」

ここまで一緒に来てもらって、いまさら遠慮もないだろう。こうなれば、とことん巻き込ませてもらいます。

「ゼファーさん、出てきて下さい。僕たちに力を貸して下さい」

フェイズさんも一緒に声を掛けてくれる。

「お願いします。雷公のような刀が必要なんです」

「ゼファーさん、いるなら出てきてよ」

キヨカも加わる。

「ゼファーさん、いらっしゃるならお願いします」

ティアナさんも加わってくれる。

「ゼファーさん」

俺たちは、重ね重ね声を掛け続ける。

「雷公を造ったゼファーさんじゃないとダメなんです。俺たちには、雷公に匹敵する刀が必要なんです」

俺たちは、何度も呼び掛けるが、ゼファーさんは一向に出てこない。これだけ叫ばれたら近所迷惑で……って、近所はないな、五月蠅(うるさ)くて文句でも言いに出てきそうなものだけどな。

「……ファイ様、シータ様、ここはわたしに任せて頂けませんか」

沈黙を続けていたミカツチさんが一歩前に出る。

「……えっ？ あ、はい。お願いします」

突然の事に驚いて、言葉を失う。

「ゼファー殿、ご無沙汰致しております。ミカツチです。此度(こたび)は、是が非にでもゼファー殿のお力が必要なのです。どうか、ご助力願えませんかでしょうか」

ミカツチさんの声は静かで淡々としているが、俺たちの誰よりも力強かった。

「ゼファー殿。どうか、お願い致します」

今にも土下座をしそうな雰囲気だ。そのくらい、深々と頭を下げている。

「やれやれ、静かな生活の邪魔をするなよな」

物静かそうな、線の細い声がしてドアが開いた。

中から出てきたのは、ほっそりとした背の高い男だった。

丸く黒い仮面は、どこか不気味で、男の雰囲気とは懸け離れているようだった。

「本当にミカツチか。久しいな」

「はい、お久しぶりです」

ミカツチさんは顔を上げる。

どうやら、この人がゼファーさんらしい。思っていた雰囲気とは、全然違った。

「で、さっきから騒がしかったのは、こいつらか」

ゼファーさんは、俺たちを一瞥(いちべつ)する。

「ゼファーさんにお問い合わせがあるんです」

「それは散々聞こえていたよ。迷惑なほどにな」

焦りすぎた言葉は、あっさりと流されてしまった。

「このオレにしかできないってのはなんだ？ そういや、ウォンカがどうか言ってたが、あいつの差し金なのか」

「はい。ウォンカさんに頼まれて来ました。俺の刀を打つ条件です」

「あいつめ……。適当な理由をつけて、オレを引きずり出したんだろう。だが、オレは行かない。行く理由がないからな。それは、たとえミカツチの頼みでもだ」

「ゼファー殿……」

「悪いな、ミカツチ。お前は知ってるだろう。オレは滅多な事じゃ、ここを動かないってのを」

「……はい。承知しております」

ミカヅチさんは力なく項垂(うなだ)れる。

ゼファーさんが動かないのはよっぽどらしいな。

イメージとは違ったけど、やっぱり頑固みたいだな。簡単に話がすすまないってわけか。

「ゼファーさん、俺たちは……」

「いいから帰れ。今からなら街へ戻れるだろう。あそこは、空き家ばかりだから、好きな所で夜を明かせ。そして、帰れ」

取り付く島もない。

「ゼファーさん」

「ウォンカに言っておけ。オレを連れ出したいなら、あの劔の主を見つけてからにしろってな」

食い下がろうとしても、突き放されてしまう。

「あの劔とは、この事でしょうか」

フェイズさんが挑戦的な言い方をする。

「これって、どれ……だ。……あっ、そいつは……」

ゼファーさんの視線の先には、雷公があった。

もしかして、フェイズさんはわかっていて……。

っていうか、どうして気付かなかったんだ。劔の主なんて、雷公の事しかないじゃないか。

「お前、それは……」

俺を見るゼファーさんは、手も足も震えていた。

「ウォンカさんから渡されました」

「本当に……お前が主なのか？」

ゼファーさんは肩を掴んで、大きく強く揺すってくる。

「は、はい。そうですけど」

その勢いに圧倒されてしまう。ちょっと肩が痛い。

「本当の本当なんだな。……いやいや、あのウォンカが、それ以外のヤツに渡すわけがないもんな。なるほど……。お前が……」

と、凝視される。

「ウォンカがオレを呼び戻すために……って事でもなさそうだな。お前、これを持った時に、なにか感じたか？」

「えっと、パチッと電気が……」

「なるほど。で、他はどうだ？」

「他……ですか？ 刀身を帯電させて……」

「なるほど。一応は使えているわけか。なるほどなるほど」

俺が言い終わる前に、なんだか自分で納得している。

「ゼファーさん、一緒に来ていただけるんですか？」

フェイズさんがここぞとばかりに確認する。

「……いや、すぐには無理だな」

「どうしてですか。ここに劔の主はいます。それが条件じゃないんですか？」

フェイズさんが食い下がる。

「あれはなんだ……。いいじゃねえか。オレは行かない。行く理由がない。劔の主には、ここで会えたからな。しかも、ミカツチがいるじゃねえか。既に知り合いみたいだし、劔については、ミカツチに手ほどきしてもらえばいいだろうよ」

「ゼファーさん、どうしても打ってもらいたい刀があるんです。それは、ゼファーさんにしかできないんです」

ここで断られるわけにはいかない。なんとしても、風伯を甦らせないといけないんだ。

「ウォンカでも大丈夫だ。あいつの腕は一流だ。どんな刀でも打てるだろうよ」

「これと同じような刀でも、ですか？」

「……………ん？」

俺の言葉にゼファーさんが反応する。

「どういう事だ？ もしかして、それと同じものを打って事か？ そいつは無理だぞ」

「いいえ、違います。これは雷ですが、風を生み出す刀があるんです。それを修復してもらいたいです」

「風を生み出す刀だと？ そんなものがあるのか？」

……雷公を打った刀鍛冶の言葉とは思えないんだけどな……。これだって、非常識なものだし。

「風ね……面白いじゃねえか。それを見せてもらおうか」

よし、興味を持ってくれた。

「じゃあ、ウォンカさんの店に。今ここにいます」

「……………じゃあ、持ってこい。ここで見てやる。……いや、修復か。ここじゃ難しいか。まったく……ウォンカのヤツ、とことんオレを呼び出したいわけか」

もしかして、来てくれるのか？

「まあ、そういう理由なら行ってやるか。で、劔の主よ」

ゼファーさんが俺を見る。

「は、はい」

「その劔はどうだ？ 使いづらくないか？」

……正直なところ、使いづらい。俺には、上手く扱えそうにない。もっとも、それは慣れていけばいい事だ。

「お前が今まで使っていたものを見せてみる」

俺が今まで使っていたもの……。

「それはできません」

「なに？」

声が陰しくなる。

「修復して欲しいのは、その刀なんです」

「……なるほどね。そういう事か。で、どうだ、そいつは」

納得してくれたみたいだ。もし、見せられないって事で断られでもしたら大変なとこだった。

「今までのものよりも重いので、慣れるまで大変です」

「そうか。ミカツチ、その辺はなんとかできるか？」

「は、はい。ファイ様は、本来は雷公の様な劔の方が力を発揮出来ます。風伯を使用する事を前提とする修練を積みましたが、本来行うべきの修練を積みれば、雷公を使いこなせるでしょう」

「そうか。ミカツチが言うなら問題ないな。それができるかは、こいつ次第だ。で、他には？
そいつの最大の特徴はどうだ？」

最大の特徴……？ もしかして……。

「この逆向きの刃ですか？」

「まだ使ってねえって事はないだろ？」

「……はい。確かに違和感があります。普通に斬れば全て峰打ちになるのは、変な感じですよ」

「人斬りがしたいと？」

「違います。倒すべき相手に、ダメージを与えられているのか、それで違和感が……」

「なるほどな。確かにこいつは、対人戦のためには打っていない」

「ファイ様は、人を斬られる様な方では……」

「ないだろうな。そういうヤツを、劔の主の候補にはしないからな、ウォンカは。試された時点で、それはわかっている」

「でしたら……」

「それでも、刃物を持てば斬りたくなるものだ。それが人というものだからな」

……確かに、そういう人もいるだろう。だけど、俺は……。

「違うと言いたそうだな。少なくとも自分は違う、と」

「……はい」

見透かされている。ここで惚ける事はしちゃいけない。

「まあ、どうしても刃が必要な時は、ミカツチに戦法を教えてもらえばいいさ。お前が戦うべき相手には、通常の刃では太刀打ちできないのだろう？」

もしかして、ゼファーさんも蟲(ベステート)の事を知っているのか？

いや、知っていても不思議じゃない。風伯の事は知らないみたいだけど、雷公を打った人だ。伝説の四刀を打った人なら、蟲(ベステート)の事を知っていてもなんら不思議はない。

「ミカツチがそれをどうしても譲ってくれとしつこかったからな……。もっとも、自分にその資格がないものわかっていたみたいだが」

そう言われて、ミカツチさんは、もごもごと口の中で言い訳をしている。

「それはもうよいのです。こうして、ファイ様が雷公の主となりました。それだけでよいのです。わたしの望みを叶えて下さるでしょう」

ミカツチさんからのプレッシャーが……。なんとかしたいという気持ちはもちろんあるんだけど、どうにもできない事もある。この件に関しては、俺はなんにもできない。

「そいつの使い方は、全部ミカツチに任せた」

「ミカツチさん、お願いします」

「はい。全力でお支え致します」

……う～ん、なんだかミカツチさんが畏(かしこ)まりすぎてて、違和感がありまくりなんだよな。もっと、今まで通りがいいんだけど、そうはいかないんだよな。

俺たちは、前の方がいいんだけど、どうしても譲れないみたいだし。

「で、オレは戻ればいいわけか。まあ、久しぶりだし、たまにはウォンカの相手をしてやるのもいいかな」

よし、なんとか話はまとまったみたいだ。

しかも、ミカツチさんにまた鍛えてもらえる。

俺一人だと、雷公に慣れるまで、認めてもらって力を引き出せるまで、どれくらい掛かるかわからなかったけど、ミカツチさんに鍛えてもらえれば、少しでも早くそうなれるはずだ。

「で、ウォンカは他になにか言ってなかったか？ あいつの事だから、ついでになにかを持ってこいくらいは言いそうだな」

「えっと……」

そういや、なにかを言ってたな。採掘はしなくてよさそうだったので安心した記憶がある。

「エピアだよ、ファイ。ウォンカさんは、エピアってのが必要だって言ってたよ」

「おお、それだそれ。さすがシータ」

「偉いでしょ、えへへ」

本当に助かった。すっかり忘れてしまっていたからな。まあ、フェイズさんとティアナさんも憶えてたっぽいけど。俺だけかよ……。

「エピアだと？ そんなものを持ってこいって言ってたのか？」

なにか驚いてるけど……なにか問題があるのか？

「ウォンカのヤツ、いったいどんなものを打とうとしてるんだ？」

「それって、そんなに珍しいものなんですか？」

「莫迦(ばか)野郎！ 珍しいなんてもんじゃねえ。貴重すぎて、俺たちだけの秘密にしてるものだよ」

「秘密にしてる？」

どういう事だ？

「詳しく、教えていただく事はできますか？」

フェイズさんも興味をそそられたみたいだな。

「まあ、別にミカツチの知り合いなら構わないか。だが、他言無用だぞ。特に商売っ気のあるヤツにはな」

ああ……キヨカはどうだろうな。こいつ、ちょっと商売に興味を持ちつつあるからな……。

ちらっと見ると、キヨカは前のめりで興味津々(きょうみしんしん)だ。

ミカツチさんの名誉のためにも、俺が全力でキヨカを止めるしかなさそうだな。

ミカツチさんも、エピアという鉱物は知らなかったらしく、興味があるようだ。

「エピアは、この廃鉱(はいこう)でたまたま見つけたんだよ。めぼしい鉱物を掘り尽くした後で、誰もいなくなったここに来て、隠居生活を決め込もうとした時に、そいつを見つけちゃった。名

前を付けたのは、オレたちだ」

「エピアというのは……そんなに貴重なんですか？」

金とかダイヤモンドとか……そういう宝石なのか？ でも、あの店にはそういう宝飾(ほうしよく)関係はなかったけどな……。どこか別の所で売るんだろうか。

「貴重なんてもんじゃねえ。最初に見つけた時は、信じられなかったもんだ。もっとも、それに気付いたのも偶然だがな」

偶然が重なって見つけた鉱物。しかも、誰にも言っちゃいけないようなもの……。

どんなものなんだ？ ますます気になってくる。

「エピアは、一言で言えば生きてる」

「「「「「.....」」」」」

俺たち全員の時間が止まったみたいだった。

生きてる鉱物？

なんだ、それは。夢のような話じゃないか。

そんなもの、あるはずがない。鉱物は無機物だ。無機物が生きているなんて、矛盾している。

「実際に動くわけじゃない。だが、生きているとしか思えないんだよ」

「詳しく聞かせて下さい」

フェイズさんの声が弾んでいる。

「エピアって鉱物は、自分で傷を修復してしまうんだよ」

「自分で修復.....？」

「完全に折れたものは戻らないが、火を入れた形を記憶しているのか、傷程度なら元に戻ってしまう。多少欠けても同じだ。どういう原理かはわからないが、修復するんだ」

「そんなの、夢みたいだ.....」

「オレだって、最初はそう思った。だが、実際に目の前で修復されていくんだ。元々頑強(がんきょう)なんだが、どうにかして傷付けると、その傷が自然と修復されていく。夢を見ているみたいだったぜ」

その時の事を思い出しているのか、ゼファーさんは空を見上げる。

自分で修復するなんて、まさに夢みたいじゃないか。

「それだけしか、オレたちはわかっていない。だが、それだけじゃなさそうな気はしてるんだ。鍛冶師の勘でしかないがな」

だけど、その勘が一番だろう。

「ちなみに、その剣にも使われている」

ゼファーさんは雷公を指す。

「えっ？」

マジで？ 雷公に使われてるのか。もしかして、あの帯電もそうなのか？

「だが、その不思議な力は、エピアとは関係ないからな。そいつは、雷電岩(らいでんがん)という、これまた貴重なものを使っているんだ。元々電気を帯びている岩なんだがな。それとエピア、そして謎の鉱物を混ぜてある」

「謎の鉱物.....？」

なんだよ、それ。新種の鉱物にはエピアって名前を付けてるのに、それは謎なのか。

「本当にこればかりはわからない。それを見つけた時に、頭の中に声がした気がしたんだよ。これを使って、特殊な剣を打とね。まあ、とにかく貴重なものの寄せ集めで、そいつを打ったんだ」

そうだったのか。

雷公って、そんな貴重なものなんだ。

いや、伝説の四刀ってだけで貴重なのはわかるんだけどな。

.....それを考えると、その内の一振りを、俺は折ってしまったんだよな。

「そんないわくがあったんですね.....」

フェイズさんは、しみじみと雷公を見ている。

「伝説の四刀は、やはり特別なものなのですね」

ミカツチさんもなにやら感心している。

「というわけで、まだまだ未知の鉱物のエピアを持ってこいってのは、ウォンカはなにを打とうとしてるんだか。気になるから、行かないといけなくなっちゃったな」

きっと、打とうとしているのは、風伯だと思います.....なんて、ここでは言わない方がいいだろうな。

「しょうがねえ。次の列車で向かうとするか。エピアは持って行ってやる」

「ありがとうございます」

俺は深々と頭を下げる。

なんだか、思わぬところで、思わぬ事情を知ったわけだけど、とにかくゼファーさんが来てくれるなら安心だ。

「だが、次はいつだったかな.....」

「明日の予定だそうですよ」

そう言ったのはティアナさんだった。

「ここに着いた時に確認しましたから」

すごい.....。そんな確認をしたなんて.....。この人は、思っているよりもしっかりしてるみたいだ。なんて、失礼だよな。

「とにかく、夜も更けてきたな。この人数だと狭いが、ここに泊まるか。街に戻っても構わないが、道中危険だしな」

そういう事なら、ここに泊めてもらおう。

「ミカツチ、ちょっと話があるから、ここで待っててくれ」

「わかりました」

そう言うと、ゼファーさんは俺たちを小屋の中に招き入れてくれた。

小屋の中は簡素で、テーブルとイス以外はなかった。

だけど、奥にある部屋が工房になっているみたいだ。

俺たちは、それとは別の部屋に通された。

「悪いが、一人なもんでな、ベッドなんかはねえ。あんたら、ここを自由に使ってくれていいから」

そう言うと、外に出ていってしまう。

「僕たちは寝袋がありますので、それで問題ありません」

フェイズさんとティアナさんは、自分の荷物から寝袋を取り出す。

「私たちも大丈夫だね」

「そうだな」

俺たちも、一応寝袋は持っている。

広さはギリギリだが、なんとか眠れそうだ。

「なんだか、色々あったね。っていうか、すごい話だったね」

早速寝袋に入ったキヨカが言う。

「そうだな。雷公ってすごい剣なんだな」

「そりゃそうだよ。だって、伝説の四刀だよ」

「そうだけどさ……」

その伝説の四刀が、こんな世界にあるのが不思議なんだよ。俺たちの世界にあるものなんじゃないのか、普通。詩稀(しき)の歴史の中で語り継がれていたもののはずだ。それが、別の世界のこの時代にあるなんて……。もっとも、時代は俺たちの時代とどの程度ずれてるかわからないけど

。

「とにかく、今日は休みましょうか。歩き疲れてしまいましたし」

「そうですね」

フェイズさんとティアナさんも寝袋に入る。

「俺も疲れたな……」

色んな話を聞いて、精神的にも疲れた。ゆっくり休もう。

ゝ蟲(ベステート)なり、

寝ようとしていた時に、蜘蛛(アラネーオ)の音が響いた。

「んあ？」

微睡(まどろ)んでいたので、その言葉が理解できていない。

ゝ目覚めよ 蟲(ベステート)なり、

再び声が聞こえた。

「なっ！ 蟲(ベステート)だと」

キヨカも同じように飛び起きていた。

フェイズさんとティアナさんは、俺たちの声を聞いて飛び起きる。

「ファイ」

「ああ」

とにかく雷公を持って外に出ようとする。

「ファイ様、シータ様」

その時、外からミカツチさんが駆け込んできた。

「おわっ」

鉢合わせして、ぶつかりそうになった。

「失礼しました。お二人とも、お目覚めでよかったです」

「ミカツチさん、蟲(ベステート)は？」

とにかく、その確認だ。

「申し訳御座いません。まだ姿は確認しておりません」

ゝ蟲(ベステート)はまもなく出現する、

鷹(ファルーコ)の声だ。

「って事は、まだ現れてないって事か？」

ゝ蟲(ベステート) 出現せり、

俺たちが確認している間に、蟲(ベステート)が姿を現したらしい。

「とにかく行こう」

そう言いつつ、キヨカは白いオープンフィンガーグローブを脱いでいる。

「そうだな」

ここにいてもしょうがない。

「お供致します」

ミカツチさんも同行してくれる。

「僕たちは、少し離れた所で見えています」

フェイズさんとティアナさんも一緒に来るみたいだが、離れた場所なら大丈夫だろう。

外に出ると、光はほとんどなく真っ暗だった。

「これじゃ、蟲(ベステート)がどこにいるかわからないぞ」

「ホントだね。明かりがいるね」

そう言うものの、そんなものがあるはずがない。手元程度ならともかく、この周辺を照らす事はできない。

「ゼファー殿にお訊ねしてみます」

ミカヅチさんが、明かりを探しに行ってくれた。

「どこにいるんだ？」

「気配を 感じよ、」

「そうだな」

目を閉じて気配を探る。見えてないんだから、なんら支障はない。

雷公を構えて蟲(ベステート)の位置を探る。

「アーちゃん、お願いね」

どうやらキヨカが蜘蛛(アラネーオ)を召還したらしい。

「以前の恩だ。我も助力しよう、」

鷹(ファルーコ)の声だ。どうやら、上空には鷹(ファルーコ)がいるらしい。だけど、やっぱりその姿は見えない。

他の気配が増えたせいで、蟲(ベステート)の気配がわかりづらくなったのは、俺が未熟だからだよな。

それでも、なんとか探ろうとする。

「ファイ、私もなんとかしてみるね」

キヨカはいつの間に持ってきたのか、フルートを演奏し始める。

「げに良き音色なり、」

キヨカの演奏に、鷹(ファルーコ)が高揚したらしい。

確かにいい音色だよな。俺もテンションが上がる。

もちろん、戦意向上のためだけじゃない。以前に、キヨカの演奏で蟲(ベステート)の動きが鈍った事がある。今回もそのための演奏だ。

「蜘蛛(アラネーオ)と鷹(ファルーコ)、蟲(ベステート)の位置はわかるか？」

「当然なり、」

「眼前の方向にいる、」

正面か。

距離は気配を感じ取るしかないな。

「動きは鈍重(どんじゅう)になっている、」

鷹(ファルーコ)は完全に見えているみたいだな。さすがってどこか。蜘蛛(アラネーオ)も感じているみたいだし。やっぱり、俺だけが感じ取れてないみたいだな。

動きが鈍くなっているみたいだな。キヨカの演奏は効果的なんだな。

「俺も頑張らないとな」

雷公を構えて気配を探る。

蜘蛛(アラネーオ)や鷹(ファルーコ)のようにできないけど、それでもなんとかするしかない。

「譜遊(ふゆ)の四護よ、間合いに入った、

なにっ？

マジかよ。

間合いに入ったらしいのに、まだ蟲(ベステート)の位置がわからない。

暗闇にも、そろそろ目は慣れてきている。それでも、姿を捉える事ができない。

「譜遊の四護よ、雷公の力を放て、

雷公の力……。

……………。

……………。

……。

ダメだ……。

やっぱり、まだ雷公を使えない。

雷公……。俺じゃやっぱり未熟なのか？ まだ、本当には認めてくれないのか？

頼むよ、雷公。

力を貸してくれ。

ここで、完全に封印したいんだ。

もう終わらせる。

そのためには、雷公の力がどうしても必要なんだ。

頼む……。

「……………雷公、頼む」

……………しかし、雷公は反応してくれない。

「譜遊の四護よ、まだ雷公の力を受け止められぬか、

力を受け止める？

引き出すんじゃなく？

どっちにしろ、俺にはまだできていない。

「いかにも、

鷹(ファルーコ)は心を読んだみたいに見える。

「逢稀(あき)の風伯は、己(おの)が体と一体となりて、その力を発揮する四刀(しとう)なり。しかし

、譜遊の雷公は、己が力を受け止めて、その力を発揮する四刀なり、

「つまり、力の出し方が違うってのか？」

「いかにも、

それぞれに特徴があるわけか。

って事は、ヒナゲシさんが持っていた炎帝(えんてい)にも、なにかしら違う力の出し方ってのがあるのか。

「椰都(なつ)の炎帝は、己が力と共にありて、力を発揮する四刀なり、

……やっぱり、思考が読まれてるよな。別にもうどうでもいいけど。

じゃあ、四刀の最後はどうなんだろうな。名前も知らないけどさ。

榮琉(はる)の氷君(ひょうくん)は、己が想いと重なりし時、その力を発揮する四刀なり、鷹(ファルーコ)は丁寧に答えてくれた。

なるほど……最後の四刀は、氷君ってのか。氷の力ってわけね。

まあ、四刀の秘密がわかったところで、すぐに雷公を使えるかってなると、そうでもないよな

。

力を受け止める……か。

こいつの力を、俺が……。

伝説の四刀の力を受け止めるなんて、ちょっとやそっとじゃ無理だぞ。

でも、それでもするしかないんだ。

俺には――俺たちには、この力が必要なんだ。

「雷公、俺はなんとか受け止めてやる。だから、その力を発揮してくれ。蟲(ベステート)を封印しなきゃならねえんだ」

とにかく、雷公と心を通わせるしかない。

このままだと、蟲(ベステート)に対抗できない。

いくら蜘蛛(アラネーオ)と鷹(ファルーコ)がいても、俺が役立たずでどうするんだよ。

「ファイ、一緒に頑張ろう」

キヨカの声援はありがたい。その声援を境に、演奏していた音色が変わる。今までの穏やかさとは違い、どこか荒々しさがある。

「うおっ」

その音色に反応したのか、雷公の力を感じる。

バチバチとした電気のようなものだが、不思議と痺れたりする事はない。

「これが、雷公の力なのか……」

まだまだこんなものじゃないだろう。雷公は、俺にはまだ無理と判断して、最小限の力の解放だけなんだろうな。

「それでもいいさ。今できる最大限で、蟲(ベステート)を封印してやる」

蟲(ベステート)は既に間合いにいるらしい。

それでも見えていないのはどういう事なんだ？ そもそも、間合いに入っているなら、本当に目の前だよな。俺の間合いなんて、そんなに広くないぞ。それとも、蜘蛛(アラネーオ)や鷹(ファルーコ)の間合いなのか？

「譜遊の四護よ、力を放て、」

よくわからないが、鷹(ファルーコ)に言われるまま、雷公の力を解き放つ。

バリバリという閃光がなにかに直撃する。

「蟲(ベステート)か」

どうやら、本当はかなり近くにいたらしい。それでも、俺の刀の間合いじゃないぞ。もしかして、雷公の間合いなのか？

暗くて正確な距離はわからないが、これが雷公の間合いみたいだな。

周囲には、他になににもないので、思い切り力を出す事ができる。

伝説の四刀は、こういう場所じゃないと無理かもな。もっとも、俺が力を制御して、限定的に放てるようになればいいんだろうけど。それは、かなり修練を積まないと無理だろうな。一朝一夕(いちしょういっせき)にできる事じゃない。

「それにしても、すごい力だな……」

「まだ、ほんの一角に過ぎない。一分(いちぶ)といったところだ、」

「一分って……一パーセント？ これだ？」

目の前では、蟲(ベステート)が電気を纏って苦しそうにしている。これで充分じゃないかと思えるのに、これでたったの一パーセント？ 雷公の全力全開って、どれだけすごいんだよ。

俺は、その力を受け止めなきゃいけないんだよな。

考えるだけで背筋が凍る。

でも、目標は高けりゃやる気も出るか。高すぎるのも問題だけど。

「もういっちょ、やっておくか」

蟲(ベステート)の動きを完全に封じるために、もう一度、雷公の力を放つ。

さっきと同じ閃光が、蟲(ベステート)に直撃する。蟲(ベステート)を纏う電気が威力を増す。

しばらくして、鷹(ファルーコ)が風でその電気を吹き飛ばした。

「なっ……」

なにをするんだ、と思ったが、蟲(ベステート)はもう動いていない。ぐったりとしていた。

そうなった状態になり、蜘蛛(アラネーオ)は糸を巻き付ける。

なるほど……。電気を帯びたままだと、これができないのね。

何度か逃がし、あまつさえ風伯を折ってしまう程の蟲(ベステート)を、なんとか封印する事ができた。

ミカツチさんや、鷹(ファルーコ)の協力があったこそだ。俺だけだったら、雷公の力を使う事なんてできなかつたらう。

「ありがとう、鷹(ファルーコ)」

「礼の必要なし。我はこのために存在する、」

「それでも、助かったよ。鷹(ファルーコ)がいなけりゃ、俺はなにもできなかった」

「精進されたし、」

「ああ。もっともっと強くなる。そして、いつの日か必ず、ミカツチさんが探していたあの蟲(ベステート)を倒してみせる」

「資格者(ティトーロン)も喜ぶだろう。我は、再び資格者(ティトーロン)の中で眠ろう、」

「本当にありがとうな」

鷹(ファルーコ)に向かって手を振る。

鷹(ファルーコ)は、闇夜に紛れるようにその姿を消した。

「我も 戻らん、」

「ああ、蜘蛛(アラネーオ)もありがとう」

蜘蛛(アラネーオ)もキヨカの中に戻った。

「お疲れさま、ファイ」

「ああ、なんとか封印できたな」

「そうだね」

「申し訳御座いません。灯りが見つからず……」

ミカツチさんが、息を切らしながら戻ってきた。

あのミカツチさんがそうなるくらいだから、相当必死に探していたんだらう。

「ありがとうございました」

「なんとか終わりました。ファーちゃんとアーちゃんが頑張ってくれたもんね。もちろん、ファイも」

なんだかついでみたいだが、鷹(ファルーコ)には本当に助けられた。

「そうですか。お力添えが出来ず、誠に申し訳御座いませんでした」

ミカツチさんが深々と頭を下げる。

「ファイさん、シータさん」

遠くから見ていたフェイズさんとティアナさんがゆっくりと歩いてくる。

「僕たちは、そろそろ次の世界へ向かわねばならないようです」

「短い間でしたが、とても楽しかったです。お世話になりました」

「どういう事だ？」

「ティアナさん、フェイズさん、どういう事？」

「シータさん、素敵な演奏をありがとうございました。できれば、僕たちの絵を残したかったのですが、それは元の世界でお目にかかれるようにしておきますね」

「私たちは、ここでの役目が終わったようです。次の世界を旅します。また、どこかでお会いする事があるかもしれません。その時はまた、ゆっくりお話ししましょう」

「待ってくれ。突然……. どういう事なんだ？ なんの説明もなしなのか。」

「そりゃ、この国じゃそういうのは難しいかもしれないけど、だからって……。」

「ファイ、二人の前……」

キヨカが力無く呟く。

「えっ？ ……………あっ」

「言われるまで気付かなかった。」

「そこには『時の口』があった。」

「それが、今まさに二人を招き入れようとしている。」

「シータ、なんとかならないのか？」

「キヨカは、その『時の口』を操れるはずだ。もし消すなりなんなりできれば、二人は行かなくてもよくなるかもしれない。」

「しかし、キヨカは力無く首を振る。」

「そんな……」

「私だってなんとかしようとしたよ。でも、なにもできないみたいなんだ」

「そっか……」

「キヨカを責める事はできない。もとより、そんな事をしてはどうにもならない。」

「それに、私たちが、あの人たちの旅に干渉しちゃダメだよな」

「そうだ。」

「言われるまで、そんな事は気にも留めなかった。」

「二人と別れたくないというのは、俺たちの我儘だ。そんな勝手な都合で、二人の旅を邪魔していいわけがない。」

「もしそんな事をすれば、二人は行くべき世界へ行けなくなるかもしれないんだ。」

「すまん。勝手すぎだよな」

「私も思ったから。……やっぱり、別れはつらいよね」

「旅というものは、別れの連続だ。出会いと同じだけ別れを経験する。」

「ファイさん、シータさん、本当に楽しかったです」

「また、どこかでお会いできますよ。私は信じています」

笑顔で手を振って別れを告げられる。

「……俺たちも楽しかったです。できれば、もっと話をしたかったです」

「私も。いっぱい、旅の話を聞きたいです。私たちの話も聞いてもらいたいです」

俺たちも笑顔で応える。

別れの時は笑顔が一番だ。

「ミカツチさん、お二人をよろしくお願いします」

「……はい。私に出来る全てを、お伝えしたいと思います」

……それはそれで大変そうだな。嬉しいけど。

笑顔で手を振りながら、夜の闇に消えるように、二人の姿が消えていった。同時に『時の口』も消えてしまう。

「やれやれ、賑やかな夜になったもんだ。……しかし、人が減ってるようだな」

「フェイズさんとティアナさんは、既に旅立たれました」

ミカツチさんは、独り言のようなゼファーさんの言葉に答える。

本当に行ってしまったんだよな……。

そう思うと淋しい。

「それはそうと、そろそろ日が昇るな」

ゼファーさんが山の向こうを指す。

「えっ？」

もうそんな時間なのか……と、その先を見ると、確かに明らんできている。

徹夜って事になるのか。

「ファイ……眠いよ」

キヨカは大きな欠伸をする。

「そう言われれば……」

蟲(ベステート)との戦いやフェイズさんとティアナさんとの別れなんかがあって、興奮状態が続いていたが、一度眠気を感じると、もうどうしようもなくなっている。

「まあ、この辺は朝が早いんだ。寝るなら、列車の中で寝ればいい。ほら、準備ができれば、行くとするか」

そう言いつつ、ゼファーさんは小屋に戻っていく。

「早く寝たいよ……」

「そうだな。疲れちまったよな……」

俺たちは、大きな欠伸を繰り返す。

もとより荷物もたいしてなかった俺たちはすぐにでも出発できる。

ミカツチさんも荷物はない。

なので、ゼファーさん次第となった。

「ほれ、こいつがエピアだ」

そう言って見せられたものは、ただの石にしか見えない。これがそんなに不思議なものなのか？

それ以外にも、ゼファーさんは色々と持っていくらしく、大きな台車を引いていた。

「お前たちも少しは手伝え」

「申し訳御座いません。わたしがお持ちします」

と、ミカツチさんが小走りで向かう。

「いやいや、ミカツチはいいだろう。そっちのお前らの依頼だろ」

……それはわかってるんだけど、ぶっちゃけ眠いからイヤだ。

それに、蟲(ベステート)と戦って疲れている。

キヨカだって、あれはあれで疲れてるだろう。

「ゼファー殿、わたしがファイ様とシータ様の代わりにお持ちしますので。お二人には、十全な休息を」

「……しょうがない。ここはミカツチに免じておくか」

「はい。お任せ下さいませ」

なんだか悪いよな。

「ファイ……持ってあげなよ。ミカツチさんにさせちゃ悪いよ」

「……………そうは思うんだけどな……………」

「わかるけどね。眠いもん」

そうなんだよな…………。

「ファイ様、シータ様、お気になさらないで下さい。これもわたしの務めですので」

そう言われたままなのは、なんだか落ち着かないけど、今はその言葉に甘えておきたい。

結局、駅に到着するまで、ミカツチさんが荷物を運んでくれた。

「本当にすみませんでした」

「ミカツチさん、ありがとうございます」

俺たちは何度も礼を言った。

「いえいえ、わたしに礼など不要です」

「そんな事ないですよ。俺たちは、ミカツチさんの弟子ですよ。師匠にそんな事をさせたんですから…………」

「そう言うなら、ファイがすればよかったのに」

キヨカが小声で呟く。

「俺たちって言っただろ。お前もなんだよ」

「なによそれ。男だったら、女の子の分まで頑張ってるよ」

ったく…………。

なんだか男ってだけで損な役回りだよな。

「さてと。それじゃ、ウォンカの所に行くかな」

ゼファーさんを先頭に、俺たちは列車に乗り込んだ。

また長い間乗るんだよな…………。

と、列車に乗って安心したのか、俺たちは座ると同時に眠ってしまった。

「到着致しました」

優しく揺すられながら、優しい声を聞きながら、ゆっくりと覚醒していく。

ぐっすり寝たみたいだな。

結構な時間眠っていたのか、体があちこち痛い。

もぞもぞと体を動かして、ゆっくり目を開ける。

「ふあああああつ……」

大きな欠伸をしながら体を伸ばす。

本当にぐっすり寝たな……。

首を動かしつつ、肩を回しつつ、ゆっくり起き上がる。

「おはようございます」

列車の中に射し込む光が眩しい。

「おはようございます、ファイ様」

「もうちょっとだけ……。あと五分」

礼節正しく挨拶をしてくれているミカツチさんの向こうで、キヨカはぐっすり寝ていた。

まあ、まだ寝てても大丈夫だろ。

「おはようございます、ミカツチさん」

「ファイ様、シータ様なのですが、早く起きて頂きたいのですが……」

ミカツチさんは、困惑したような雰囲気だ。

「まだ大丈夫じゃないんですか？」

さすがに、到着までは時間があるだろう。列車での移動なんだから、少しくらい寝坊してもいいんじゃないだろうか。

「それがですね……」

「おい、早く降りるぞ。いつまで寝てやがるんだ」

言いつらそうにしているミカツチさんに代わって、ゼファーさんがキヨカを思い切り叩き起こす。

「ほら、起きやがれ」

問答無用に叩かれて、さすがのキヨカも目を覚ます。

「痛い。痛いってば。やめてよね」

バシバシとゼファーさんの手を払っている。

まだ少し寝惚けているみたいだ。

「もうちょっと寝かせてよ」

「起きろってんだ。このまま、放置していくぞ。お前たちのために来たってのに」

「おい、シータ、起きろって」

確かに俺たちが頼んで来てもらってるからな。あまり機嫌を損ねるのはどうだろう。

ここは、キヨカにすばっと起きてもらわないと。ただ、どうしてこうも起こされるのかわから

ないんだけどな。

「そろそろ、降車してもらえますか」

「申し訳御座いません。すぐに降車致します」

ミカヅチさんが、誰かに謝っている。

「もしかして、俺たちって降りないといけないんですか？」

状況がよくわからないのでゼファーさんに訊く。

「当たり前だろ。もう着いてんだから。早くウォンカの店に行くぞ」

「えっ……？」

もう着いてる？

確か、幽谷へは四日くらいだったよな。その帰りなんだから同じ時間だろ。って事は、もう四日経ったのか？ ……俺たち、四日も寝てたって事になるのか？

「俺たちって、四日くらい寝てたんですか？」

さすがに寝ている間の記憶はないからな……。

だけど、いくら蟲(ベステート)と戦ったからって、四日も眠るなんて、よっぽどじゃないか？
もしかして、雷公の影響なのか？ それだけ、体力を消費するんだろうか。

「いいや、出発してから一日だ。あの次の日だよ」

「でも、そんなに早く……？」

列車の速度が変わったのか？ 俺たちが乗ったのは、特急だったとか？

「そうみたいだな。どういうわけかわからんが、そういう事なんだ」

ゼファーさんもよくわかっていないみたいだ。

「おそらく、蟲(ベステート)の影響ではないかと思われます」

ミカヅチさんが耳打ちしてくる。

「蟲(ベステート)の影響……？」

どういう事だ？

「蟲(ベステート)は世界の理(ことわり)を狂わせると云(い)われております。蟲(ベステート)が封印された事により、狂っていた世界の理が正されたのだと思われます」

「……なるほど」

そう言ったものの、いまいよくわかっていない。

要は、蟲(ベステート)は世界を破壊するだけじゃなくて、狂わせるって事なのか。で、蟲(ベステート)を封印したから、正常に戻った……と。

って事は、ここと幽谷の間の距離が狂っていたって事なのか？

蟲(ベステート)の影響ってそんなにあるのか。

四日の距離が、本当は一日の距離って……。

よくわからないけど、とにかくそういう事なんだよな。

「じゃあ、俺たちは四日寝てたわけじゃない、と。あれは昨日の事なのか」

「はい」

ミカヅチさんが嘘を言うわけではないけど、やっぱり信じられない。

「そういうわけだ。とにかく早く降りるんだ」

そうだった。

到着してるなら、早く降りないと。

「おい、シータ。着いてるんだぞ。早く降りて、朝ご飯にしようぜ」

「……ん？ ご飯？ いいね、それ」

なんてヤツだ。冗談のつもりだったんだが、本当にご飯の一言で起きやがった。

「そうですね。朝餉（あさげ）に致しましょう」

「そうだな。腹ごしらえをしていくか」

なんとなくそういう流れなのね。

俺も腹が減っているからいいんだけど。

「じゃあ、食べに行こう」

食事を前にして、キヨカは荷物を持つと列車を降りていく。

どうもこいつは、目の前のご飯に夢中で、この日数に関して気になってないみたいだ。

「ファイ、ちょっと寝すぎたみたいだけど、そうじゃないんだよね。食べながらでもいいから、ゆっくり説明してね」

……気にしてたみたいだ。

「どうでもいい。さっさと行くぞ」

ゼファーさんもそれに続く。

「そうですね。行きましょうか」

ここにいる必要はないし、さっさと行こう。

「では、参りましょう」

最後にミカツチさんが降りる。

「ご迷惑をお掛け致しました」

列車の乗務員に謝っていた。

……俺たちがさっさと起きなかったからだよな。悪い事をしてしまった。

列車を降りて飲食街に向かった俺たちは、キヨカが選んだ店に入って食事をする事になった。その店は、様々な料理があるファミレスみたいな感じで、なかなか当たりだった。やっぱり、こういう時のキヨカはすごい。

そんな食事を終えて、ウォンカさんの店がある芸術家横町へ向かう。

「この辺は変わらんな……。まあ、変わる要素がないのかしれないけどな」

ゼファーさんは、周囲を見回しながら歩いていく。

「そうですね。この辺りは、以前と変化はないですね」

「そういえば、ミカツチさんって、この辺に来た事があるんですね」

俺も気になっていた事をキヨカが訊く。

「はい。この国にやって来た際に、刀の修復をして頂きました」

「そういうこった。その時に、その刃についても、散々訊かれたな」

ゼファーさんが懐かしむような口調で言う。

ゼファーさんがそう言うって事は、ウォンカさんの店で修復してもらったんだよな。腕は確かかって事だよな。もっとも、こんなすごい刃を造れるんだから、相当の腕ってのはわかってるんだけど。

「おおっ、変わらんな……」

ウォンカさんの店に到着すると、ゼファーさんが店を見上げる。

「よう、来てやったぞ」

と、躊躇なく店の中に入っていく。

「おお、来たか。思ったよりも早かったな」

そんな声の中から聞こえてくる。

「入りましょうか」

キヨカとミカツチさんに声を掛けて、俺たちも中に入る。

「おお、本当に連れてきたか……。ん？ あの二人はどうしたんだ？ 代わりにミカツチがいるみたいだが」

「フェイズさんとティアナさんは、旅に出ました」

そう告げると、ウォンカさんは驚く。

「おいおい、頼まれてたナイフが、もうすぐなんだがな。まあ、代金はもらってるんだが……」

どうしたものか……とウォンカさんが呟く。

そういえば、フェイズさんはナイフを注文してたんだよな。それを受け取らずに、時空を移動してしまった。

「ねえ、私たちが預かっておく？」

「そうだな……」

俺たちだって、フェイズさんたちの世界に行けるかわからないけど……。

「きっと大丈夫だよ」

あの人たちなら、全く違う世界って事もなさそうだし、時代も近そうだな。もしかしたら、本人じゃなくても、子孫の人とか……。その可能性があるよな。

「俺たちが預かるのか」

「というわけで、私たちがフェイズさんたちに渡します」

「そっか。まあ、こっちとしては、それでもいいんだけどな。せっかくのナイフだ。きちんと使われて欲しいからな。あんたらなら、預けても大丈夫だろうよ。完成したら、あんたらに渡そう」

「はい」

なんだか責任重大だな。絶対、あの人たちに渡さない。なんとしても元の世界に戻って……そこからは、やっぱり神様頼みだな。神様なら、なんとかしてくれるかも。

「そっちの話はもういいか？ ウォンカよ、オレが造るのはどんなものだ？」

「少しは落ち着けよ」

「さっさと終わらせて、オレは帰りたいんだ」

「お前は相変わらずだな。少しは居着けばいいのにな」

「オレには、こういう場所は合わないんだ。もっと静かで、なにもない所がいいんだ」

「まあ、引き留めたところで、勝手に出て行くだけだろうがな。とにかく、仕事はきちんとしてくれよ」

「わかってるさ。だから、どんなものか教えてよ」

「そうだったな。こいつだ」

そう言って、ウォンカさんは、風伯をカウンターの上に置く。

「こいつは……」

ゼファーさんは腕を組んで唸る。

「どうしたんだろう？」

「なんとなく、想像はできるけどな」

俺たちがこそこそと話していると、

「お前、とんでもない使い手だな」

肩をがっちりと掴まれる。

えっ？ と驚く間もなく、

「刀が可哀想だろ、これじゃ。役目を全うしてはいるが、ここまで酷使されるとはな……。感謝してるんだろうな」

仮面越しでも、表情が伝わってくる。その迫力に圧倒される。

「は、はい」

当然だ。風伯には、かなり助けられた。風伯がなければ、俺は今ここにいないかもしれない。

「ならいい。……しかし、それにしても、綺麗に折れていやがるな」

「こいつを造った刀匠は、かなりの腕だな」

「そうだな」

ウォンカさんとゼファーさんが確認するように言葉を交わす。

「こいつを繋げる……わけじゃないんだろ？」

「それでもいいんだが、そうしたところで、また折れるのが関の山だ」

「そりゃそうだ。で、こいつをどうするんだ？ なにかに使うから、こうしてるんだろ？」

「そういうわけで本題だ。こいつを鍛え直して、短刀を造る」

ウォンカさんが風伯を分解しながら話を続ける。

「ほう……こいつは便利な。刃のすぐ替えができるのか。だとすれば、これと同じ形の刃を造れば、新しくなるってわけだな」

「そういう事だ」

「了解した。短刀と長刀か……。しかも、なかなか面白い素材なんだろ？」

ゼファーさんが俺たちに確認するように訊く。

「面白い……？」

「お前、こいつは風を作り出すみたいな事を言ってただろ」

ああ、そういう事か。

「そうです。この雷公みたいな刀なんです」

「了解した。久しぶりに面白いものができそうだ。ウォンカは短刀の準備をしておいてくれ。オレは長刀を仕上げてやる」

「こうもやる気になってくれるとはな……。お前ら、大船に乗った気でいろ。ゼファーが本気になれば、すごいもんができあがるぞ」

「よろしくお願いします」

俺は二人に頭を下げる。

「任せときな。お前は、その間に、雷公を自分のものにしておけよ」

「……はい」

雷公を握りしめる。

雷公の力を受け入れる……か。なんとかするしかないな。

「ウォンカ殿、お願いがあるのですが」

それまで、ずっと黙って立っていたミカツチさんが口を開く。

「なんだ、ミカツチ。その劔はもう持ち主が決まったんだぞ」

「それは納得の結果ですので、満足しております」

「じゃあどうした？」

「譲っていただきたい刀が御座います」

「刀だと？ お前は二振り持っていたよな」

「今回は、それでは役不足なのです。そうですね……あれなど、譲って頂きたいのです」

そう言ってミカツチさんは、壁に掛かっている巨大な刀を指す。

ゲームなんかでよく見る、斬馬刀のような刀だ。

「あれか……。ミカツチが使うのか？」

その問いに、ミカツチさんは、力強く頷く。

「お前には必要だと思わないがな……」

「いえ、どうしても必要なのです。譲って頂きたい」

その言葉には、底知れない力が隠れている。

「お前に振れるのか？」

「試されますか？」

ミカツチさんには珍しく挑発的だ。

「わかった。とにかく持ってみろ」

ウォンカさんは、壁から外し、俺に手渡す。……って、俺？

「ほれ、これをミカツチが振れると思うか？」

どうして俺に？

渡されたその刀は、想像以上に重かった。雷公よりも重い。

こんなものを振るなんて、腕がちぎれてしまいそうになるんじゃないか？ なんとか振れなくはないだろうけど、体を持っていかれそうになるだろうな。

「お前からミカツチに言ってやれ。こいつは無理だろ」

「えっと……」

俺はどう言えばいいんだろう。確かに普通なら無理だろう。でも、どこかでミカツチさんなら……という気持ちがある。

「……ミカツチさんなら、大丈夫だと思います」

そんな俺の言葉に驚いたのは、ミカツチさんだった。

「ファイ様……」

「こいつは、ミカツチの弟子だってよ」

「……なるほどな。そりゃ、師匠なら問題ないと思うわけか」

別にそういうわけじゃない。刀を交えたからこそ、一緒に修練を積んだからこそわかる事だ。

確かに軽々とはいかないだろう。でも、振れない理由はない。

「よくできた弟子だ。ほれ、自分で持ってみろ」

ウォンカさんは、俺の手からその刀を取り上げ、ミカツチさんに渡す。

「……………」

受け取ったミカツチさんは、想像以上だったのか、重そうに持っている。

「どうだ？」

「……はい。ここまでの重量感は想像以上です。しかし、これでしたらなんとか……」

「やせ我慢はよすんだな」

「いいじゃねえか、ウォンカ。ミカツチ、ちょっと外で振ってみろ」

「はい」

ゼファーさんは、ミカツチさんを連れて外に出る。

「ねえ、私たちも行こう」

「あ、ああ」

「しょうがねえか」

俺たちも少し遅れて外に出る。

「おい、ちょっと外は危険だからな」

ゼファーさんが、周囲に呼び掛けるように大声で叫ぶ。確かに、今外に出てきたら危険だ。周囲の店の人たちは、何事かと顔を覗かせる。しかし、外には出てこない。

「よし、大丈夫だろう」

それを確認して、ゼファーさんは満足そうに頷く。

「さあ、ミカツチ、やってみろ」

「はい」

ミカツチさんは、俺でも重いその刀を下段に構える。

その瞬間、周囲に緊張が走る。

俺たちは、自然と数歩下がる。

「参ります」

その声を合図に、ミカツチさんは、その刀を自在に振り始める。

「すごいね……」

「……………ああ」

言葉が出てこない。

あんなに重い刀なのに、まるで重さを感じさせない。しかも、美しい舞のようだ。

まさに演舞。

「ほう……」

ゼファーさんは腕を組んで感心している。

「負けたな」

ウォンカさんも感心している。

「さすがだ、ミカツチ。もういいぞ」

そんなゼファーさんの言葉に、ミカツチさんは刀を地面に突き立てる。

「……いかがでしたか？」

少し息を荒げている。呼吸を乱す事のないミカツチさんが珍しい。だけど、それだけ大変だって事だよな。

「合格だ。ウォンカ、お前はどうか？」

「言うまでもないだろう。いいものを見せてもらった。そいつはお前のものだ、ミカツチ」

「有り難う御座います」

ミカツチさんは、深々と頭を下げる。

「騒がせてすまなかったな」

ゼファーさんはそう叫ぶと、店の中に入っていく。

それに続いて、ウォンカさんとミカツチさんも中に入っていく。

俺たちも顔を見合わせて中に入る。

すごかった……。

信じられないものを見せられた。

店内に戻ると、ミカツチさんは、あの刀の鞘を受け取っていた。

「これはお前にやろう」

「無償で頂くわけには参りません」

「さっきのが代金だ」

「しかし……」

「いいんだよ。造ったはいいものの、使えるヤツがないんじゃない。飾りものじゃないんだ。使ってくれるなら、それが一番いい。……しかし、どうしてまたそんな刀が必要なんだ？」

「それは、ファイ様の修練にお付き合いする為です」

「えっ？」

突然、俺の名前を言われて驚く。

「俺の修練？」

「ファイ様さえ宜しければ、わたしが修練の相手をさせていただきます」

「それは、嬉しいですけど……」

ゼファーさんの所でも、俺の修練の相手をしてくれるって言ってたな。

だけど、そのための刀を用意してまでなんて……なんだか、申し訳ない気がしてくる。

「ファイ様はお気になさらずとも結構です。これは、わたしの役目ですので」

だから、そういう支家とか四護とか……そういうのは俺としてはどうでもいいんだけどな……。でも、ミカツチさんにとっては、それが重要なんだよな。だから、口に出す事はできない。

「まあ、雷公とまともに打ち合うなら、これくらいは必要か……」

ゼファーさんは何度も頷いて納得している。

それは俺も同じだ。雷公と打ち合うなら、細い刀身の刀じゃ折れてしまうだろう。それがどんな業物でも。受けるためには、それなりの刀身が必要だ。少なくとも、同等の刃が必要になる。だから、ミカツチさんは……。

「ありがとうございます。よろしく願います」

「決まりだね。じゃあ、風伯はウォンカさんとゼファーさんに任せて、私たちはミカツチさんの道場に行こうか」

キヨカが場を仕切る。

「こっちは任せておけ。そうだな……二〇日くらいあればできるだろう。どうだ、ウォンカ？」

「どうだろうな。この刀身とエピアの馴染み具合次第だろ」

「オレの見立てなら、問題はないんだがな」

「ゼファーがそう言うならそうなんだろう。とにかく、それくらいで完成させてやるよ」

「願います」

それまでに、俺は雷公を使いこなせるようになってないとな……。

俺たちは、その足で列車の出発日を確認するために駅に向かう。

「三日後か……」

次の出発は三日後だった。そりゃそうだろう。今日到着したわけだからな。そんなに頻繁にないんだよな。

「じゃあ、しばらくゆっくりしてようか」

「それしかないよな」

俺たちは、部屋でも借りてゆっくり過ごすつもりだったのだが、

「いえ、これから向かいましょう」

ミカツチさんのそんな提案に、俺たちは目を丸くする。

「でも、列車が……」

「シータ様、列車などなくとも問題御座いません。走ればすぐで御座います」

「走るって……」

考えるだけでぞっとする。列車で丸二日の距離だぞ。列車がそれほど速くないとはいえ、距離にすれば相当だ。

「蟲(ベステート)の影響がなくなった今、あの街はさほど離れておりません」

「そっか……」

完全に失念していた。蟲(ベステート)の影響で、距離感覚がおかしくなっていたっぽいんだよな。現に、幽谷からここまで、行くのに丸三日はかかったのに、帰りは一日だったもんな。それをふまえると、そんなに離れていないのかもしれない。

「これも修練です。わたしの道場まで走りましょう」

「ファイ、頑張ろうよ」

「そうだな」

そういうわけで、俺たちは走っていく事にした。

「はあ、はあ、はあ……ファイ……待ってよ……」

後方でキヨカが立ち止まってしまっている。

距離は近くなっているといっても、隣接しているわけじゃない。隣には違いないのだが、それぞれの間には荒野が広がっている。

俺たちは、そんな荒野をひたすら走っていた。

「おい、シータ。早く来いよ」

そう言いつつ、俺も少し休みたいので、キヨカにはそこでじっとしててもらいたかったりする。

距離にすればそれほどじゃなくても、荷物を持ちながらるのが計算外だった。ただ走るだけなら、俺もキヨカも問題ない。だが、旅の荷物はなかなか負担だ。舗装された道ならまだ楽なんだけど、さすがに荒野でそれを求めるわけにはいかない。足場が悪い状態で、トロリーバッグ

のキャストなんて使い物にならない。なので、どうしても持つ事になってしまう。

「シータ様、あと少しで御座います」

そう励ましてはくれるものの、決して荷物は持ってくれない。それも修練だという事だ。通常とは違う負荷をかけつつ、体力向上を目指すってところだろう。それには賛成だ。少しでも早く雷公を使えるようになりたいからな。そういう事も含め、キヨカの荷物を少し持っている。

「ミカヅチさん……ちょっと休もうよ……」

「今、十分に休んでおられますよ」

かなりのスパルタだ。支家と四護の関係性は、こと修練に関しては関係ないらしい。口調は丁寧なんだけど。

「そういう事だ。シータ、道場に着いてからゆっくり休もうぜ」

「はう～。お腹空いたよ……」

キヨカはしゃがみ込んでしまう。こりゃ、動けないだろうな……。

「携帯食料があるだろ」

列車の旅のため買ってあった分があるはずだ。

「温かいご飯が食べたいんだよ」

まあ、携帯食料は味気ないもんな。その気持ちはよくわかる。

「だったらなおさらだろ。向こうに着かないと、なにもないぞ」

「私は修練いらないでしょ」

まあ、そうかもな。

「シータ様も、一緒に鍛えられるべきだと思います。シータ様が風伯を使えるようになれば、蟲(ベステート)との戦いも優勢となるでしょう」

「それはそうかもだけど……。私にはアーちゃんがいるし……。それに、フルートとピッコロも……」

「楽器を奏でるためにも、体力は必要かと存じます」

正論だったな。確か、高校の頃にブラスバンド部が、グラウンドを走っている姿を見た事がある気がする。なにをしてるんだろうとか思ったけど、そういう事だよな……と納得してしまう。

「そういう事だ。頑張ろうぜ」

「ファイ……」

助けを求める声は無視。

「そろそろ行こうぜ。日が暮れちまう」

「そうですね。ここで日が暮れてしまいますと、周囲は闇に包まれてしまいます」

灯りなんてないからな。真っ暗闇の中、進むのは危険だろう。

「まさか、ここで野宿なんてするつもりか？ 俺は勘弁だぞ」

そう言うと、キヨカはううっと唸り立ち上がる。

「わかったよ。お腹空いたから行こう」

動機がどうであれ、結果的にオツケーだろう。

「ご飯のためだ。早く行くよ……」

走り出したキヨカは、待っていた俺たちを抜いていく。

「まだまだ走れるではありませんか」

どこか愉しそうに、ミカツチさんも走り出す。

「ファイ、おいてくよ」

「おい、待てよ」

少し休めて体力は……わずかに戻った。

さて、あとどれくらいかわからないけど、走りますか。

結局、到着したのは日が暮れた頃だった。

あと少しというところで、日が沈んでしまい、周囲が見えなくなったのだが、かろうじて街のわずかな灯りが見え、なんとか到着する事ができた。

到着した俺たちは、そのまま飲食店に駆け込んだ。

なにを食べたか覚えていない。とにかく、空腹を満たすために、なにかを食べた。

それから、ミカツチさんの道場へやってきて、今は道場のひんやりとした床の上に、大の字になって寝ころんでいる。

荷物はミカツチさんが運んでくれた。そのミカツチさんは、今は布団なんかを用意してくれている。

荷物がなかったとはいえ、ミカツチさんは呼吸を乱す事なく余裕だった。

言い訳じゃないけど、荷物がなければ俺だって余裕だったと思う。

「疲れたね……ファイ」

「そうだな……。こんなに疲れるとはな……」

列車で丸二日の距離を、走って半日足らずで来れたって事は、やっぱり距離が変わってるんだろう。列車なら数時間だろう。

「お疲れ様でした。寝所の用意が調いましたので、移動して下さい」

「すみません」

「ありがとうございます」

俺たちは、重い体を起こして、ゆっくりと歩いていく。

こりゃ、明日は筋肉痛のパターンか？ その辺、ホントに俺って成長しないよな……。

「本日は、ゆっくりとお休み下さいませ」

そう言われるまでもなく、俺たちは布団に入るとすぐに寝てしまった。

「ん、んん……」

翌朝は、予想外にすっきりとした目覚めだった。

まだ日は昇っていないのか、外は薄暗い。

「ん？ 大丈夫……なのか？」

筋肉痛で動けないのを予想していたのだが、どうやらそういう事はないみたいだ。痛みすらない。

「これが、修練の成果……なのか？」

以前のミカツチさんとの修練でも、もっと疲れて動けなくなる事もあった。その時も、筋肉痛にはならなかったな……。だとしたら、俺は少しでも成長しているのか。

こんな事で実感するってのもどうなんだろうな。

「シータは……まだ寝てるのか」

無理に起こす必要はないので、そのまま寝かせておく。

「まだ朝早いみたいだけど、眠気はないんだよな……」

普段なら二度寝でもするんだが、今日は目が冴えている。むしろ、このまま寝るのはもったいないとさえ思っている。

「ちょっと道場を借りようかな……」

じっとしている時間が惜しい。

雷公を持って道場に向かう。

「さっすが……」

道場に向かう途中、外から声が聞こえてきたので、声がる方へ行くと、そこには素振りをしているミカツチさんがいた。その手には、あの大きな刀が握られている。

「おはよう御座います、ファイ様」

俺の姿を見つけたミカツチさんが、素振りを中断して挨拶をする。

「あ、お、おはようございます」

慌てて返す。

「まだ日が昇るには少々早いですよ」

「でも、目が覚めちゃって……」

「もしや、わたしが……」

「いいえ、違います。単に早く目が覚めただけですって。っていうか、ミカツチさんこそ早いじゃないですか」

「わたしは日課ですので。特に早くはないのです」

「そうなんですか……」

ここでの日々を思い返すと、ミカツチさんよりも早く起きてきた事ってなかった気がする。自主練で早く起きても、必ずミカツチさんがいた。

まさか、こんな早くから……。

「じゃあ、俺も一緒にいいですか」

ミカツチさんの横に立ち、雷公を構える。

「もちろんです」

ミカツチさんも刀を構える。

そして、なんとなく自然の流れで、それぞれ素振り始める。

なんだか懐かしいな……。そんな昔の事じゃないのに、こうしていた事が遙か昔の事みたいに思える。

二人の素振りの音だけがしている。二人とも、大きなものを振っているのだから、風切り音が大い。なかなかの迫力だ。

それにしても、ミカツチさんはすごいよな……。細い体で、あんな大きな刀を振るなんて。重いはずなのに、そんな事を思わせない。竹刀を振っているみたいに軽々としている。

俺も雷公を振っているが、結構ギリギリだ。風伯と違って、重さは比じゃない。ミカツチさんに鍛えてもらってなかったら絶対に無理だった。

そういや、俺には速さよりもパワーの方が向いてるんだったけ。ミカツチさんの見立てじゃ、雷公は理想的なんだろうな。

俺としては慣れてない重さなので四苦八苦だ。

まずは慣れないといけない。

それにしても、不思議な剣だよな……。でも、人を斬る事はしないから別にいいんだけど。それでも、蟲(ベステート)相手でも峰打ちってのは不安だったりする。

って事は、この雷公の力——雷撃で戦えて事か。だとしたら、なおさら雷公を使いこなせないとな。

雷公の力を受け入れる……か。俺が強くなるとだよな。

「ファイ様」

素振りをしながら、ミカツチさんが話し掛けてくる。

「はい、なんですか？」

「もうお分かりかと存じますが、わたしには——わたしたちには、雷公という伝説の四刀はありませんでした。その為、使命を果たす事が叶いませんでした」

「ミカツチさん、その事は……」

「分かっております。……ファイ様。ファイ様は、使命を果たして下さいませ」

「……………はい」

とても重い言葉だった。

仮面で表情はわからなくても、言葉だけでそれが見える。

詳しくはわからなくても、なんとなくの想像はできる。ペアじゃなく、ミカツチさんが一人だという事は……そういう事なんだろう。

「俺たちは、なにがなんでも、元の世界に帰る必要もありますし。ほら、フェイスさんのナイフを渡さないと」

「そうですね」

「それに、ミカツチさんから預かったものもありますし」

以前に別れる際、黒と紫の房を預かっていた。

「ですから、絶対に蟲(ベステート)を封印します」

ミカツチさんからの預かり物や、フェイスさんのナイフもそうだけど、学校の事もあるからな。

もうどのくらい休んでいるのかわからない。旅の最初の頃は日数を数えていたけど、今はもうよくわからなくなっている。

この国には結構長くいるよな……。もう何ヶ月だ？ 二ヶ月くらいか？

……ミカツチさんの道場に行くまでに一ヶ月くらい住んでたよな。で、ミカツチさんの所で一ヶ月くらい修行して、そこからだから……。

三ヶ月くらいなのか？

季節が変わらないから、時間の感覚がよくわからない。だけど、それくらいは経ってるのか。

だとしたら、旅に出てもう半年くらい？ 元の世界は……年が変わってたりするのか？

封印した蟲(ベステート)は……どのくらいかわからなくなってるな。でも、半分くらい……か？

……って、半分だとしても、この先、この倍の時間が掛かるのか？ 帰る頃には、また夏。一年間の休学。それって、留年だよな。課題でどうにかなるとは思えない。

……………もう、この事は考えないようにしよう。もう無理だ。

「どのくらい掛かるかわかりませんが、絶対にやり遂げます」

「お願い致します」

深々と頭を下げられる。

ミカツチさんにとっては、それはなによりも重要な事なんだろう。その気持ちを受け取る義務が、俺たちにはあるんだろう。

久しぶりのミカツチさんとの素振りを終え道場に戻ると、なんだかいい匂いが充満していた。

「お疲れさま」

ひょこっとキヨカが顔を覗かせる。

「シータ？」

「シータ様」

どうしてキヨカが……？ と思っていたと、ミカツチさんが慌てて駆け寄る。

「シータ様、その様な事はわたしが致します」

「気にしないでよ。私だってなにかしたいし。このくらい、別になんでもないし」

「ですが、それでは……」

「ミカツチさん。私はシータ。ミカツチさんに教えを請う弟子です。弟子が師匠のご飯を作るのは当然でしょ？」

「ですが……」

キヨカの言葉に、ミカツチさんはなにも言い返せない。こいつ、今日はなんだか迫力があるな。

「それに、目が覚めてから退屈だったんだよね……。起きたらファイはいないし。で、表から声がするな……と思ったら、ミカツチさんと逢い引きしてるんだもん」

逢い引きって……。言い返してもスルーされるだけだ。

「そういうわけで、ファイの胃袋をがっちり掴むためのご飯だよ」

言い切った。こいつ、そういう事を臆面もなく、堂々と言い切りやがった。その根性はすごいな。リアクションをすれば、話が終わらなくなりそうだから、もう内容はどうでもいい。

「そういうわけみたいですから、さっさと食べましょう」

正直、腹ペこだ。久しぶりの素振りを頑張りすぎた。

「……はい。では、有り難く頂戴致します」

ミカツチさんは神妙な空気で席に着く。

「冷めないうちにどうぞ」

キヨカは手を広げて促す。俺たちは、いただきますの唱和とともに、キヨカが用意してくれた朝ご飯を食べた。

朝食を食べ終えて、少し休憩をしてから道場に向かう。

そこにはキヨカの姿もあった。

「私もちゃんと修行するよ」

どうやら、キヨカも戦う気になっているらしい。

本当なら、そういう危険な事は俺に任せろ……と言いたいところだけど、実際はありがたい。俺だけじゃ心許ないからな。それに、やっぱり自分の身は、自分で守れる方がいいだろう。

ミカツチさんもそういう考えなのか、キヨカの修行には賛成だった。

俺たちの反対がなかった事で、キヨカはますますやる気になっている。

悪い事じゃないし、これでいいんだろう。

道場での修練だが、雷公を使っただけのものだ。室内で振り回していいのか疑問だが、ミカツチさんがそう言うならいいんだろう。もちろん、ミカツチさんはあの刀だ。キヨカだけは竹刀を持っている。

「私も本格的にしたいよお」

キヨカは駄々をこねるが、

「恐れ入りますが、シータ様は竹刀で基礎を鍛えて下さい」

「わかりました……」

ミカツチさんの言葉に、渋々ながら素振りを始める。

「ファイ様。ファイ様は、まず雷公の重さに慣れて下さい」

「はい」

「技巧に拘らず、基本に忠実に、馴染む事を心掛けて下さい」

「はい」

「それでは、打ち込んで下さい」

「はい」

俺はミカツチさんに言われた通り、基本的な打ち込みを繰り返す。それはまるで、剣道の初心

者が、太刀筋を確認しながらみたいだ。いや、まさに今の俺はそうなのかもな。

雷公の重さに振り回されている。

だけど、すぐにものにしてみせる。

風伯の時だって、最初は悪戦苦闘した。だけど、ちゃんと使う事ができるようになった。だから、雷公だって……。

俺は早く雷公を使えるようにならないといけないんだ。

「雑念が多い様です」

ミカツチさんの叱責。

「すみません」

「今は雷公と心を通わせる様にして下さい。余計な事は、ひとまずお忘れ下さい」

「……はい」

ミカツチさんには、誤魔化しなんて通用するはずがない。俺でさえ、刀を交えれば相手の心情がわかるんだ。ミカツチさんならもっとだろう。

雷公。俺はお前の全てを受け止める。だから、俺を信用して、全てを預けてくれ。

それだけを考えながら、ひたすらミカツチさんと剣戟を繰り返した。

心の歌を奏でて 一仮面の国一 ①の②

<http://p.booklog.jp/book/105003>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105003>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105003>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ